Nexus Switch Intersight デバイス コネクタ

この章は、次の内容で構成されています。

NexusSwitch Intersight デバイス コネクタの概要

デバイスは、各システムの Cisco NX-OS image に組み込まれている NexusSwitch Intersight Device Connector（NXDC）を介して Intersight ポータルに接続されます。

Cisco NX-OS Release 10.2(3)F 以降、NX-OS 機能のデバイス コネクタは、接続されているデバイスに対して、セキュリティで保護されたインターネット接続を使用して情報を送信し、Cisco Intersight ポータルから制御命令を受信できる安全な方法を提供します。

Cisco Nexus スイッチは適切に svc.intersight.com を解決し、ポート 443 でアウトバウンドで開始される HTTPS 接続を許可することが必要です。svc.ucs-connect.com を解決するには、Cisco Nexus デバイスにDNSを設定する必要があります。svc.intersight.com への HTTPS 接続にプロキシが必要な場合は、プロキシは NXDC ユーザー インターフェイスで構成できます。プロキシ設定については、NXDC の構成 （2 ページ）を参照してください。

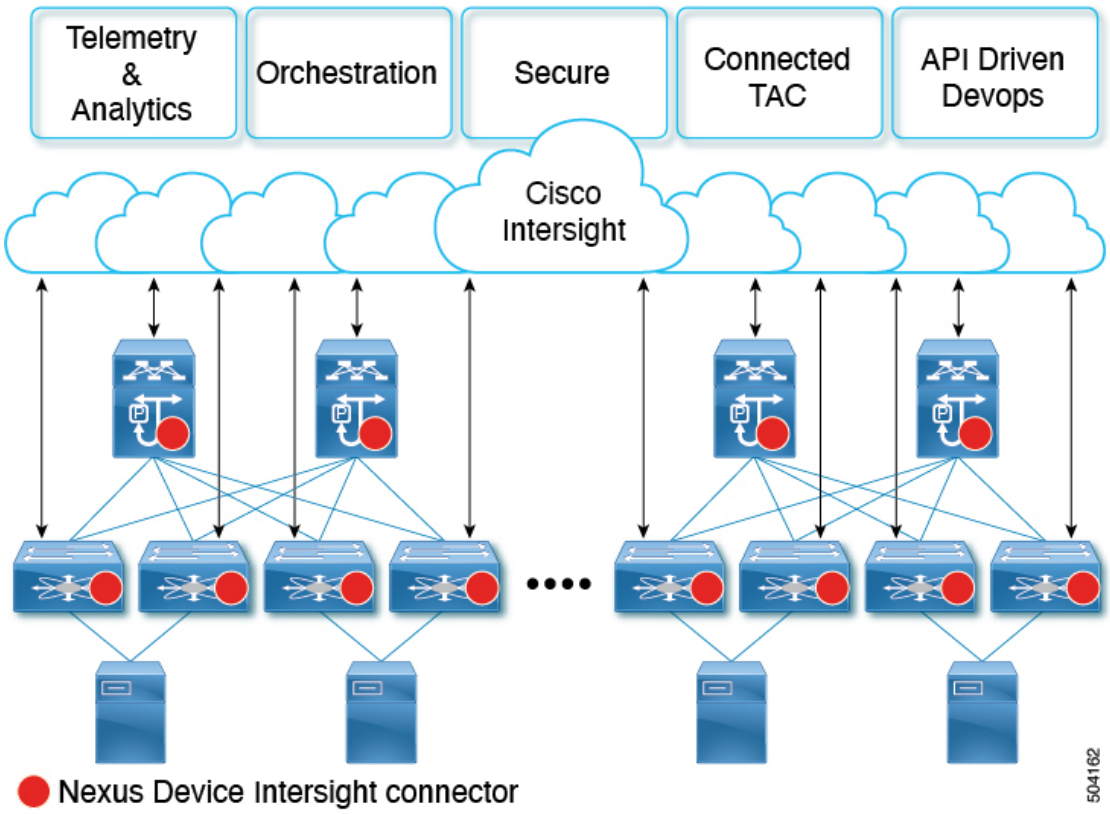
NXDC は、すべての Cisco Nexus シリーズ スイッチでデフォルトで有効になっており、デフォルトで起動時に開始され、クラウドサービスへの接続を試みます。安全な接続が確立され、デバイス コネクタが Intersight サービスに登録されると、デバイス コネクタは詳細なインベントリ、正常性ステータスを収集し、採用テレメトリ データを Intersight データベースに送信します。インベントリは 1 日に 1 回更新されます。

NXDC は Intersight に接続すると、Intersight サービスによる更新を介して、最新のバージョンに自動的に更新される AutoUpdate 機能をサポートします。

NXDC は、接続された TAC 機能をサポートして、デバイスからテクニカル サポート データを収集します。

NXDC 機能の統合は、次の機能を持つ非管理対象スイッチを解決するために行われました。

- 非管理対象スイッチから基本データを収集するための迅速なソリューションを提供します。
- すべてのデバイスのプライベートで整理されたデータを 1 つの場所に保存します。
- クラウドでデータを安全に管理します。
- 将来の拡張やアップグレードに柔軟に対応できます。



NXDC の構成

NXDC を構成するには、以下の手順に従います。

（注） デフォルトでは、NXDC 機能は有効です。

手順の概要

1. **no feature intersight**
2. **install deactivate** <*intersight rpm*>
3. **intersight proxy** <*proxy-name*> **port** <*proxy-port*>

4. **intersight use-vrf** *vrf-name*
5. **intersight connection** <*name*>
6. **intersight trustpoint** <*trustpoint-label*> *[host-name]*

手順の詳細

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	**no feature intersight** 例： `switch(config)# no feature intersight`	Intersight プロセスを無効にし、すべての NXDC 構成とログ ストアを削除します。

ステップ 2	**install deactivate** <*intersight rpm*>
	例：
	`switch(config)# show install active | i intersight`
	
	`intersight_64-1.0.0.0-10.2.3.lib32_64_n9000`
	`switch(config)# install deactivate intersight_64-1.0.0.0-10.2.3.lib32_64_n9000`
		起動時に自動的に実行されないように Intersight を無効にします。

ステップ 3	**intersight proxy** <*proxy-name*> **port** <*proxy-port*> 例： `switch(config)# intersight proxy proxy.esl.cisco.com port 8080`	Intersight 接続用のプロキシ サーバーを構成します。 • *proxy-name* : プロキシ サーバーの IPv4 または IPv6 アドレスまたは DNS 名。 • *Proxy Port*：プロキシのポート番号を入力します。範囲は 1 ～ 65535 です。デフォルト値は 8080 です。 （注） Cisco Nexus スイッチのスマート ライセンス設定でプロキシが有効になっている場合、NXDC はこの設定を継承し、Cisco Intersight Cloud との接続を試みます。
ステップ 4	**intersight use-vrf** *vrf-name* 例： `switch(config)# intersight use-vrf blue`	接続が指定された vrf 経由の場合、NXDC の vrf を変更します。 （注） デフォルトでは、Intersight は管理 vrf/namespace で開始されます。
ステップ 5	**intersight connection** <*name*> 例： `switch(config)# intersight connection qaconnect.starshipcloud.com`	Intersight 接続の DNS 名を設定します。Intersight から NDSaaS への変更に使用できます。 • *name*:名前の値は文字列です。最大サイズは 128 です。
ステップ 6	**intersight trustpoint** <*trustpoint-label*> *[host-name]* 例：	Intersight 接続の証明書を構成します。

	コマンドまたはアクション	目的
	`switch(config)# intersight trustpoint test test`	*trustpoint-label*：Crypto ca trustpoint ラベル。詳細については、『*Cisco Nexus 9000 Series NX-OS Security Configuration Guide*』を参照してください。

NXDC の検証

NXDC 構成を確認するには、次の Bash コマンドを使用します。

（注） 機能 Bash を有効にする必要があります。

コマンド	目的
run bash exec ip netns exec <vrf-name> curl http://localhost:8889/Systems	デバイス コネクタのシステム情報を表示します。
run bash exec ip netns exec <vrf-name> curl http://localhost:8889/DeviceConfigurations	デバイスの構成を表示します。
run bash ip netns exec <vrf-name> curl http://localhost:8889/DeviceConnections	デバイス接続を表示します。
run bash ip netns exec <vrf-name> curl http://localhost:8889/DeviceIdentifiers	デバイス ID を表示します。 （注） 次の show コマンドを使用して、デバイス ID を取得できます。 • **show inventory chassis**
run bash ip netns exec <vrf-name> curl http://localhost:8889/SecurityTokens	セキュリティ トークンを表示します。
run bash ip netns exec <vrf-name> curl http://localhost:8889/HttpProxies	HTTP プロキシ情報を表示します。

ペイロード タイプが bash に設定されている場合は、NX-API を使用して show コマンドを実行できます。

例：

```
payload={
  "ins_api": {
    "version": "1.0",
    "type": "bash",
    "chunk": "0",
    "sid": "sid",
    "input": "ip netns exec management curl http://localhost:8889/HttpProxies",
    "output_format": "json"
```

```
  }
}
```

結果：


```
{
  "ins_api": {
    "version": "1.0",
    "sid": "eoc",
    "type": "bash",
    "outputs": {
      "output": {
        "body": "[\n  {\n    \"ProxyHost\": \"\",\n    \"ProxyPort\": 0,\n
\"Preference\": 0,\n    \"ProxyType\": \"Disabled\"\n  }\n]",
        "code": "200",
        "msg": "Success"
      }
    }
  }
}
```

翻訳について
このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。